古代文字資料館発行『KOTONOHA』第 270 号（2025 年 5 月）

重唇音の軽唇音化について(7)
―玄奘訳法華経陀羅尼―

吉池孝一　中村雅之

1. はじめに

中村：前回は資料編ということで梵本のローマ字と玄奘訳法華経陀羅尼との対応表を作りました。

吉池：玄奘の陀羅尼は、Karashima(2001)[1]に掲載された中央アジア本系統の梵本とよく合うことより中央アジア本系統の梵本に拠ったことが分ります。

中村：今回はそれをもとに陀羅尼の唇音字と梵本のローマ字との対応を確認しようということでしたね。

2. 玄奘訳法華経陀羅尼

吉池：前回提示した陀羅尼と梵本との対照表を再度挙げておきます。今回は唇音の部分を青の網掛けで示しています。最初の陀羅尼には「第一」のような表記は見えませんが、便宜としてこれ以降は第一とすると、その後に「第二、第三」（荻原雲来・土田勝弥(1935)[2]の梵文では連続している）「第四」「第五」「第六」と続きます。これら六種の陀羅尼は、法華経陀羅尼品の“地の文”の中の各所に分散しています。最後の十九丁裏と二十丁表は法華経普賢菩薩勧発品の陀羅尼です。「第七」とは書いてありませんが、便宜上「第七」としておきます。いま『梵本法華経』（荻原雲来・土田勝弥編、山喜房佛書林、1935 年）のサンスクリットのローマ字を利用して、この漢訳陀羅尼と対応させると次のとおりです。

・荻原雲来・土田勝弥(1935) はケルン・南条本に河口慧海氏がチベットより将来した梵本等を参照して訂正したローマ字本。Karashima(2001)[3]はケルン・南条本をローマ化したものを出し、それと異なる梵文を出所とともに記す。

・○の部分は荻原雲来・土田勝弥(1935)による梵文。Karashima (2001)により異文を下に記し注番号を付す。注には異文の出所を記す。

・漢訳は早稲田藏本による。高麗藏本との相違はまとめて注記した。両者を合わせ見る必要がある。なお、早稲田藏本を高麗藏本で訂正した部分には[]を付した。

---

[1] Karashima, Seishi(2001) *A Glossary of Kumārajīva's Translation of the Lotus Sutra* 妙法蓮華經詞典、東京：創價大學國際佛教學高等研究所。

[2] 荻原雲来・土田勝弥(1935)『梵本法華経』山喜房佛書林。

[3] Karashima, Seishi(2001) *A Glossary of Kumārajīva's Translation of the Lotus Sutra* 妙法蓮華經詞典、東京：創價大學國際佛教學高等研究所。

陀羅尼品の陀羅尼

【第一】多垤他[4]

〇anye　manye　mane　mamane　cite　carite　same

1 遏爾而制反　2 末爾同上　3 末泥去聲　4 末末泥同上　5 質帝　6 靳脂列反履帝　7 閃式染反謎莫閉反

〇samitā　viśānte　mukte　muktatame　same　aviṣame

8 閃弭密爾反　9 多鼻扇重長帝　10 目帝　11 目荅謎　12 三謎　13 阿毗三謎

〇samasame　jaye　kṣaye　akṣaye　akṣiṇe　śānte

14 三磨短三謎　15 素清磨三謎　16 刹重曳　17 惡刹曳　18 惡刹埵奴戒反　19 扇帝

〇samite　dhāraṇi　āloka-bhāṣe　pratyavekṣaṇi

20 閃謎　21馱刺力割反尼　22 阿路迦婆去聲婆波羅弗補[沒]反帝　23 鉢刺著知也反吠刹埵

〇nidhiru　abhyantara-niviṣṭe　abhyantara-pāriśuddhi

**rdiṣṭe[1]

24 涅奴紇反栗地瑟齊竹皆反　阿蹁蒲眠反怛邏涅栗地瑟齊　25 阿蹁怛邏波利秫尸聿反茀

〇mutkule　mutkule　araḍe　paraḍe　sukāṅkṣi　asamasame

26猛烏沒反矩𢇁　27 沒矩𢇁　28 阿刺齊　29 鉢刺齊　30輸式庾反迦差初理反　31 阿三磨三謎

〇buddha-vilokite　dharma-parīkṣite　saṃgha-nirghoṣaṇi　nirghoṇi

K 無[2]

32 勃陀毗盧枳帝　33 達磨波利差低　34 僧伽涅伽去怛尼　35 僧伽涅具殺尼

〇bhayâbhaya-viśodhani　mantre　mantrâkṣayate　rute

36 跋耶重聲跋邪短聲毗輸達尼　37 曼喹丁結反唎　38 曼多羅刹也低　39 胡魯低

〇ruta-kauśalye　akṣaye　akṣaya-vanatāye　vakkule valoḍa

---

[4] 多垤他は tad-yathā の音訳。「tad は，指示代名詞 tad-「それ」の中性・単数・主格 tat が連声変化したもの。yathā は接続詞で「次のように」。」（大崎正瑠 2015;142 による）。この語の後から陀羅尼が始まる。なお、陀羅尼の終りは svāhā。「svāhā は，祈祷の終わりに用いるもので，「幸いあれ！」である。手許の梵英辞典では，“Hail!” “Hail to!” “May a blessing rest on!” との説明がある（Monier, p. 1284-3)」（大崎正瑠 2015;143 による）。大崎正瑠(2015)「サンスクリット原文で『般若心経（大本)』を読む」『東京経済大学人文自然科学論集』第 136 号、127-151 頁。

mahārutakauśalye[3]　　abale [4]

40 摩訶胡魯多憍擧教反設𣏟　41 惡刹曳　　42 惡刹伐拏多邪　　43 阿跋𣏟

〇amanyanatāye　　svāhā

44 阿末若而夜反那多邪　　45 蘇波訶

※梵文。K.(ケルン・南条本)、O.(Kashgar manuscript)。欠落等による不明は**。

1. O.　2. K.としては無表記　3. O.　4. O.

※漢訳。高麗藏本との異同。→の右は高麗藏本。

7. 莫閉反の閉→問。8. 密爾反の密→蜜。18. 埸の辛→羊。22. 弗補泥反の泥(誤か)→沒。23. 埸 の辛→羊。24. 涅奴紇反の反→支（誤)。24. 齊竹皆反の竹→以（誤)。24. 怛邏涅栗地瑟齊の邏→羅。25. 第→第。26𤍠 烏沒反の𤍠→殟。28. 齊→躋（誤)。32. 勃陀毗の陀→陁。33. 低→佢。35. 涅具殺尼の殺→煞。36 跋耶重聲跋邪の耶と邪→耶。38. 低→佢。39.　低→佢。40. 憍擧教反の教→敖（誤か)。42. 邪→耶。44. 邪→耶。

漢訳陀羅尼と梵文との対応（数字は頻度）

末 ma 5、謎莫閉反 me 1、弭密爾反 mi 1、鼻 vi 1、目 muk 2、謎 me 5、毗 vi 3、磨短 ma 1、謎 mi 1、婆去聲 bhā 1、鉢 p(pra) 1、吠 ve 1、蹁蒲眠反 bhyan 1、蹁 bhyan 1、波 pā 1、波 vā 1、沒 mut 1、鉢 pa(para) 1、磨 ma 2、勃 bud 1、波 pa 1、跋 bha 2、曼 man 2、摩 ma 1、伐 va 1、跋 ba 1

第二　多垤他

〇jvale　　mahā-jvale　　ukke　　tukke　　mukke　　aḍe　　aḍāvati

uke[1]　　K 無 [2]　　aṭe [3]　　aṭāvati[4]

46 十伐唎　47 摩訶十伐唎　48 鄔計　　48 目計　　50 阿齊去聲　51 呵吒重伐底長

〇nṛtye　　nṛtyāvati

52 涅同上栗齊　53 涅栗吒伐底同上

※梵文。K.(ケルン・南条本)、O.(Kashgar manuscript)、H_5.(Readings of the Central Asian Manuscript fragments)。

1. O,H_5.uke。2. K.としては無表記。3. O,H_5. aṭe。4. O. aṭāvati。

※漢訳。高麗藏本との異同で特記するもの無し。

漢訳陀羅尼と梵文との対応（数字は頻度）

伐 va 2、伐 va(vati) 2、摩 ma 1、目 muk 1

第三

〇iṭṭini　vitṭini　cittini　nṛtyani　nṛtyāvati　svāhā |

ciṭini [1]　nṛtini[2]

54 伊緻抳女儿反　55 毗緻抳　56 旨緻抳　57 涅栗緻抳　58 涅栗著稚邪反伐底短聲

※梵文。O.(Kashgar manuscript)、H_5.(Readings of the Central Asian Manuscript fragments)。

1. O,H_5. ciṭini。2. O,H_5. nṛtini。

※漢訳。高麗藏本との異同。→の右は高麗藏本。

58.著稚邪反の邪→耶。

漢訳陀羅尼と梵文との対応（数字は頻度）

毗 vi 1、伐 va(vati) 1

第四

〇aṭṭe　taṭṭe　naṭṭe　vanaṭṭe　anaḍe　nāḍi　kunaḍi　svāhā |

K 無 [1]　nunaḍe [2]　nunaḍū [3]

59 遏嫉除皆反　60 捺嫉　61 努捺嫉　62 阿捺廚稚俱反[清]聲　63 捺遲俱捺[遲]

※梵文。K.(ケルン・南条本)、O.(Kashgar manuscript)、H_5.(Readings of the Central Asian Manuscript fragments)。

1. K.としては無表記。2. H_5.[O.***]nunaḍe。3. H_5.[O.***]nunaḍū。4. svāhā→K.としては無表記。

※漢訳。高麗藏本との異同。→の右は高麗藏本。

62. 廚稚俱反聲の聲→清聲。63. 俱捺聲の聲(誤)→遲。

漢訳陀羅尼と梵文との対応

無し

第五

〇agaṇe　gaṇe　gauri　gandhāri　caṇḍāli　mātaṅgi　pukkasi

ghori/ gori [1]　K 無 [2]

64 阿揭捉　65 揭捉　66 具唎　67 健馱長唎　68 旃荼唎　69 摩陞祇　70 十重羯西

〇saṃkule　梵文無　vrūsali　sisi　svāhā |

jā(ṃ)gu(li) [3]　agasti [4]

71 僧矩𢇁　72 常婁履　73 勃盧薩抳　阿揭悉底

※梵文。O.(Kashgar manuscript) 、D1,D2.(Gilgit MSS)、Lü. (旅順博物館藏殘片)。
1. O,D1,D2.ghori。Lü.B-18[Verso].gori。2. K.としては無表記。3. O.jā(ṃ)gu(li)。4. O.agasti。
※漢訳。高麗藏本との異同。→の右は高麗藏本。
64. 65.捉の辛→羊。

漢訳陀羅尼と梵文との対応（数字は頻度）
摩 mā 1、勃 v(vrū) 1

第六
〇iti me iti me iti me iti me iti me|
74 伊底謎 75 伊底謎五遍

〇nime nime nime nime nime|
76 儞謎 77 儞謎五遍

〇ruhe ruhe ruhe ruhe ruhe|
78 胡魯醯去聲五遍

〇stuhe stuhe stuhe stuhe stuhe svāhā|
stahe [1]
79 薩[蘇紇反]頞都可反醯五遍

※梵文。O.(Kashgar manuscript) 、D1,D2.(Gilgit MSS)。
1 .O,D1,D2.stahe。
※漢訳。高麗藏本との異同。→の右は高麗藏本。
79.薩頞→薩蘇紇反頞。

漢訳陀羅尼と梵文との対応（数字は頻度）
謎 me 4

普賢菩薩勧発品の陀羅尼
【第七】怛㩉他
〇adaṇḍe daṇḍa-pati daṇḍ'āvartāni daṇḍa-kuśale
daṇḍāpativate [1] daṇḍāvarte daṇḍāvartani [2]
1 遏彈去聲嫉徒皆反輕 2 彈茶重長鉢底丁履反伐帝 3 彈茶伐栗 4 彈茶伐栗怛尼 彈茶狗舍𣪍

○daṇḍa-sudhāri　　sudhāri　　sudhāra-pati　　buddha-paśyane　　sarva-dhāraṇi
5 彈茶蘇達唎　　6 蘇馱長唎　　7 蘇馱囉鉢底丁履反　8 勃陀重鉢設帝　　9 薩嚩馱剌尼*

○āvartani　　梵文無　　saṃvartani　　saṃgha-parīkṣite
sarvabhāṣyāvartane [3]　　su-āvartane [4]　　saṃgha-parīkṣaṇi [5]
阿伐栗怛泥去聲** 10 薩嚩婆去聲莎所也反伐栗怛泥　11 蘇阿伐栗怛尼輕　　12 僧伽波唎刹尼依[字]
*と**は一続きで 9

○saṃgha-nirghātani　　梵文無　　梵文無　　梵文無
asaṃge [6]　　saṃgāpagate [7]
13 僧伽涅[伽]怛尼　　14 薩達摩蘇波唎差初履帝　　15 阿僧祇巨奚反　　16 僧伽波揭低

○　　梵文無　　梵文無
tṛ-adhvasaṃ{gha}gatulyāprāpte [8]　　sarva-saṃgasamatikrānte [9]
17 怛唎阿[特]縛僧伽咄略上聲鉢羅弗補沒反帝　　18 薩縛僧伽三末底羯爛清長帝

○dharma-parīkṣite　　sarva-ruta-kauśalyânugate
sarvadharmasuparīkṣite [10]　　sarvasattvarutakauśalyânugate [11]
19 薩縛達摩[薩を削除]蘇鉢理差初履帝　　20 薩縛薩埵胡魯多憍重設略[力]迦反奴揭帝

○siṃha-vikrīḍite　　anuvarte　　vartani　　vartāli　　svāhā
21 僧所繒反訶毗重訖唎雉帝　　22 蘇波訶

※梵文。O.(Kashgar manuscript)、Wi[Turf].(旅順博物館藏殘片)、R_3(The Petrovsky Collection)。1.O,Wi[Turf].daṇḍāpativate。2.O,Wi[Turf].daṇḍāvarte　daṇḍāvartani。3. O, Wi[Turf].sarvabhāṣyāvartane。R_3[No.58]. sarvabhā*****。4. O, Wi[Turf].su-āvartane。5. O, Wi[Turf].saṃgha-parīkṣaṇi。6. O, R_3[No.58],Wi[Turf].asaṃge。7. O, R_3[No.58],Wi[Turf].saṃgāpagate。8. O.tṛ-adhvasaṃ{gha}gatulyāprāpte。R_3[No.58]. tṛ-adhvasaṃgatulyāprāpte。Wi[Turf]. tṛ-adhvasaṃgatulyaprāpte。9. O, R_3[No.58],Wi[Turf].sarva-saṃgasamatikrānte。10. O, Wi[Turf].sarvadharmasuparīkṣite。11.ここは荻原雲来・土田勝弥(1935) と Karashima (2001)の引くケルン・南条本とが異なる箇所。Karashima (2001)が引くケルン・南条本は sarvasattvarutakauśalyânugate。
※漢訳。高麗藏本との異同。→の右は高麗藏本。
1 媄徒皆反の徒→從(誤)。4 彈茶狗舍𤍠の狗→拘。6 唎→利。8 勃陀の陀→陁。10 婆去聲の去聲→去(誤)。12 尼依→尼依字。13 涅怛尼(誤)→涅伽怛尼。16 低→佤。17 怛唎阿持の持(誤)→特。19 薩蘇鉢の薩(誤)→無し。20 略方迦反の方(誤)→力。

漢訳陀羅尼と梵文との対応（数字は頻度）

鉢 pa(pati) 2、伐 va(vate) 1、伐 va(var) 5、勃 bud(buddha) 1、鉢 pa 1、嚩 va 2、婆 bhā 1、波 pa 2、縛 va 4、鉢 p(prā) 1、弗補沒反 p(pte) 1、末 ma(mati) 1、摩 ma 1、鉢 pa(parī) 1、鉢 pa 1、毗重 vi 1、波 vā 1

3. 玄奘訳法華経陀羅尼に見る軽唇音化の有無

中村：上記「漢訳陀羅尼と梵文との対応」を 36 字母の唇音の順に振り分けましょう。

吉池：次のとおりです。

幫母

鉢 p(pra) 1、鉢 p(prā) 1、鉢 pa(para) 1、鉢 pa(pati) 2、鉢 pa(parī) 1、鉢 pa 1、波 pā 1、波 pa 3、波 vā 2

滂母

無し

並母

鼻 vi 1、毗 vi 4、毗重 vi 1、婆去聲 bhā 1、婆 bhā 1、蹁蒲眠反 bhyan 1、蹁 bhyan 1、勃 bud 1、勃 bud(buddha) 1、勃 v(vrū) 1、跋 bha 2、跋 ba 1

明母

末 ma 5、末 ma(mati) 1、謎莫閉反 me 1、謎 me 4、謎 mi 1、弭密爾反 mi 1、目 muk 3、謎 me 5、磨短 ma 1、磨 ma 2、沒 mut 1、曼 man 2、摩 ma 3、摩 mā 1、

非母

弗補沒反 p(pte) 1、

敷母

無し

奉母

吠 ve 1、伐 va 3、伐 va(vati) 3、伐 va(vate) 1、伐 va(var) 5、嚩 va 2、縛 va 4、

微母

無し

玄奘陀羅尼の音訳の特徴

中村：並母字は梵文の v と bh, b の両種に対応しています。v は、鼻 vi 1、毗 vi 4、毗重 vi 1、勃 v(vrū) 1 に対応し、bh, b は婆去聲 bhā 1、婆 bhā 1、蹁蒲眠反 bhyan 1、蹁 bhyan 1、勃 bud 1、勃 bud(buddha) 1、跋 bha 2、跋 ba 1 に対応します。施向東(2009)[5]が言うように並母に v が

[5] 施向東(2009)「玄奘訳著中的梵漢対音和唐初中原方音」『佛教漢語研究』朱慶之編、商務

対応する場合、狭い母音が後続します。前回述べたように、軽唇音化した/vi/という漢語音節が無かったため並母の/bi/で代用したということでしょう。奉母字は全て梵文の v のみに対応します。

吉池：ところで梵文 v に対応する漢字について例外のように見えるものが二つあります。一つは、幫母字は梵文の p に対応するのが大勢ですが、 波だけは p の他に v と対応します。いずれも陀羅尼の締めの言葉 svāhā を音訳した「蘇波訶」の波ですので、語彙にかかわる何らかの事情があったのかもしれません。二つ目は、勃 v(vrū)です。なぜ並母の勃を利用したのかです。

中村：一つ目は音声の問題でしょう。svāhā（蘇波訶）の「vā」が長母音だからです。「va」には「伐」などの入声字を用いますが、長母音の「vā」に入声字は合わず、かと言って長母音に使える歌韻には奉母字がないので、やむなく「波」を用いたということではないかと思います。

二つ目の勃 v(vrū)ですが、なぜ奉母の佛ではなく並母の勃を利用したのか説明が困難です。

吉池：そうしますと、梵音 vrū の v に並母字の勃が対応する一例を除けば、v に並母字が対応する理由は説明できます。梵文の bh と b には並母字を当て、v には奉母字を当てている。一例を除き両者は綺麗に分れる。

中村：玄奘の言語では並母と奉母が区別されたとする施向東(2009)や橋本貴子(2021)[6]と矛盾しません。陀羅尼のような同質の資料に依ると、軽唇音化が明瞭に出るということですね。

音注は誰のものか

吉池：もう一つの問題は非母字の弗補沒反と p(pte)との対応です。類似の陀羅尼は第一の「22 阿路迦婆去聲婆波羅弗補[沒]反帝」にも非母字の弗補沒反としてあります。波羅弗補[沒]反帝の方には対応する梵語が無いのですが、陀羅尼第七の「17 怛唎阿[特]縛僧伽咄略上聲鉢羅弗補沒反帝」tṛ-adhvasaṃ{gha}gatulyāprāpte の鉢羅弗補沒反帝 prāpte と同様と見て良いとしたならば非母字が 2 例使われています。橋本貴子(2021:131)は非母の「弗」にわざわざ「補没反」と幫母の反切を付しているのは玄奘の頃に「弗」がすでに p-でなくなっていた（軽唇音化していた）からだと論じています。つまり、この反切を玄奘によるものと見なしているように見えます。

印書館、223-259 頁。原載『語言研究』1983 年第 1 期。

[6] 橋本貴子(2021)「対音資料から見た唐代の軽唇音化について：附論 日母の脱鼻音化」『神戸外大論叢』第 73 巻第 3 号、121-146 頁。

中村：確かにそう見えます。

吉池：しかし、その反切を玄奘のものとする根拠は述べません。余程の根拠がない限り、玄應音義の中に見える反切は玄應のものとして処理するのが普通ではないでしょうか。もちろん、反切のそれぞれが先行資料からの引用であることは十分にあり得るわけで、実際に顧野王の玉篇や陸法言の切韻を（明記せずに）用いていることについてはいくつかの論述もあります。しかし、問題となっている「弗補沒反」の反切を直ちに玄奘のものと見なすことは出来ないのではないでしょうか。

中村：できませんね。もちろん実際には玄奘の反切である可能性もありますが、それはあくまでも可能性にすぎません。玄奘の反切と明記されていない以上、玄應の反切として処理するのが手続き上は無難です。

吉池：玄奘に軽唇音化が起っていたことは認めていいとして、玄奘はどうして prāpte を「鉢羅弗補沒反帝」と音訳し、軽唇音の「弗」を使用したのでしょう。

中村：本来であれば、梵語の-p(t)-に対して/put/のような音を持つ漢字を当てたかったのでしょうが、沒韻に幫母字がなかったため、次善の策として物韻の「弗」/fut/を使用したということではないでしょうか。橋本貴子（2021:131）にも同様の指摘があります。

吉池：そうすると、玄奘は音訳漢字として「弗」/fut/は最適ではないことを知りつつ音注として反切「補沒反」を付して注意を促したと見ても不自然ではないということになります。玄奘が付したと見ても不自然ではない。

中村：そうなのですが、玄奘の訳場に参画していた玄應自身が、玄奘の意を汲んで反切を付したとしても特段の不都合はありません。ふつう玄應の反切に軽唇音化は見られないとされますが、音を重視する陀羅尼においては玄應も特段の注意を向けたと見る事はできるかもしれません。いずれにしても、音注が玄奘のものか玄應のものか明らかにすることは困難です。

吉池：おおざっぱに言えば 7 世紀中葉は軽唇音化の過渡期で、軽唇音化している人としていない人が混在していた、そういった時期なのでしょう。印象として、玄奘は軽唇音化に敏感であり、玄應は無頓着であったように見えます。

まとめ

中村：これまで軽唇音化の状況をうかがうことのできる資料をいくつか見てきました。玉篇

（543 年成書）の状況から、6 世紀の南方ではすでに軽唇音化が起こっていたようだということを確認しました。北方では 7 世紀中葉の玄奘（602-664 年）による陀羅尼の音訳漢字に軽唇音化が反映しています。8 世紀前半の慧苑音義（720 年頃）の反切および梵漢対音資料においても軽唇音化が確認できました。

吉池：ただし、玄奘と同時期の玄應による一切経音義の反切には明確な軽唇音化が見られないことから、7 世紀中葉は過渡期で、軽唇音化している人としていない人が混在していた可能性があります。そうであるならば、半世紀ほど遡った切韻の反切に軽唇音化が見られないのも、あるいは陸法言自身は軽唇音化していたけれども保守的な反切表記に従ったということかもしれません。

中村：玉篇の状況を考えれば、切韻序に記された開皇（581-600）の初めの陸法言宅での音韻談義に集まったメンバーの中には軽唇音を持つ言語の話し手がいたと考えても不自然ではありません。それでも反切においては、軽唇音を持たない伝統的な音の方を正当と認めたということなのでしょう。

吉池：この他に、平山久雄氏の軽唇音化に関する説についても議論しました。毛詩音における軽唇音化の状況、さらに 9 世紀初頭の慧琳音義におけるＣ類とＢ類の合流に関しても問題になりました。

中村：平山氏は毛詩音では音声的な軽唇音化が生じていたとしましたが、この資料ではそもそも反切上字と被切字の間に類一致が見られるので、そこから軽唇音化をうかがうのは方法論として不可能です。また、平山氏は慧琳音義においてＣ類とＢ類の合流が見られるとし、例として「分（Ｃ類）」と「斌（Ｂ類）」を挙げた訳ですが、慧琳音義においてこれらを含む韻の唇音が合流していたことを示す例はありません。臻摂だけでなく、全体を見ても、至韻の１例を除けば、唇音字の反切において直接にＣ類とＢ類が合流している例はありません。平山氏が挙げた「分」と「斌」の合流は架空のものです。牙喉音においてはＣ類とＢ類の合流が広範囲で認められるので、それを唇音にも適用して合流を論じることは不可能ではないかも知れませんが、厳密さを欠いた論であるという印象は否めません。

吉池：平山氏は、Ｃ類とＢ類の韻の合流をもって、軽唇音が音韻的に独立すると見なすわけですが、この辺りは我々とは音韻観が違うので、今回は深くは踏み込みませんでした。我々は反切や音訳漢字に明確に軽唇音化が確認できるならば、その段階で軽唇音が音韻的にも独立していたと考えます。

中村：つまりは、音韻史における音韻とは何かという問題になります。これはある意味で宗

教論争に似た部分があるので、これ以上は立ち入らないことにします。また、当初は 6 世紀の北方資料としてソグド文字碑文も対象にする予定でしたが、扱いがかなり難しいので今回は断念しました。

吉池：それでは軽唇音化をめぐる対談は以上で終わりということにしましょう。